

二大先輩をしのぶ

中西 哲先生をしのぶ

杉田 隆三

先生は昨年夏病に倒れられ一度は回復されたかに見えましたが、本年3月再入院され、山で鍛えた強じんな体と不屈の精神力で病魔と闘われましたが9月26日遂に不届の客となられました。優れた業績を挙げられ、神戸大学に中西ありといわれ、中西時代が到来しようとした矢先のご逝去、惜しんでもあまるものがあります。

先生は昭和3年相生市若狭野町に生まれ、龍野中学、広島高師、広島文理科大学へと進み、広島大学を経て昭和30年に神戸大学教育学部に来られました。そして教授、大学院教授、また、教育学部長としての重責も果されました。この間、昭和36年に「日本のブナ林の着生植物」の研究で学位を授与され、昭和45、46年には米国テネシー大学に留学、昭和49、50年には第16次日本南極地域観測隊に加わり、いずれも地衣、コケ類の分布、生態を研究して来られました。南極から帰国された時、標本保護のため詰めて帰られた南極氷でオンザロックをいただいたことも懐しい思い出です。

森林植生の研究にも精力的に取り組み調査範囲は国内はもちろん国外にも及び、その報告は124編にもものぼると聞いています。著書としては新しい構想の編集として評価のある「日本の植生図鑑」（保育社）などがあり、学会や社会的な面でも多数の委員を歴任され、この面での功績も大なるものがあります。

先生の兵庫県での足跡をたどって見ますと、研究面では県下をくまなく踏査して別記のように数々の報告をされています。社会面では兵庫県文化財審議会委員、兵庫県自然環境保全審議会委員及び自然公園部長など多数の委員をされました。そして兵庫県生物学会の会員中には先生の名講義を聴講し、研究の指導を受けた者が多数いますが、学会の総会、現代生物学ゼミナルでの講演、研修会での実地指導、兵庫生物への寄稿と随分お世話になりました。

私的なことになりますが、私が先生から植生調査の手ほどきを受けたのは昭和37年でした。加古川の溜池の調査の帰路、加古川駅近くの居酒屋で盃を傾けながら、中学の同窓ということもあって「中西さん、植生調査も面白そうだからちょっとやって見ようと思うが教えてもらえんかなぁ」「面白そうだからちょっとやって見ようで



東北地方 飯豊山にて（1976年7月）

はあかんで、本気で取り組む気がないと指導できんよ」
「まあそんなかたいこと言わんと教えて下さいよ」という会話から始まり、資料の取り方、組成表の組み方を教えていただいて初めて書いたのが「加古川の池沼植物」でした。以来、何回となく研究室にお邪魔してご指導をいただき、また調査にも同行させてもらったりして今では何とか一人立ちできるようになりました。これも一重に先生のお陰と深く感謝致しております。

先生はあの眼鏡の下の鋭い眼光で先を見通し、積極的に物事を処理されました。また、研究に対して厳しさをもっておられ教え子にもものぞまれましたが、弟子思いは人一倍で病床にあっても最後まで弟子の研究を心配しておられたと聞いて頭が下がる思いです。

先生もまだまだやりたい事が沢山あり心残りであったと推察しますが、私達もまだまだ教えていただかなくてはならぬ事が沢山あったのに「なぜこんなに早く」と思いますが今ではせんない事です。最後に今は亡き先生の生前の業績を讃え、先生のごめい福をお祈りして筆をおきます。

稲田又男常任理事逝く

シダ博士の稲田さんの訃報に接したとき、わが生物学会の大きな宝を失ったようがっくりした。つい先日、奥様をお連れしてのご散歩中のお元気なお姿をおみかけしたばかりというのに、これも、それも、人生とは申せ、哀しいことです。

先生は、ひょうひょうとした気宇壮大な大人風のお人柄、鼻にかかったお声で、おおらかに話かけられる静かなご性格は、私どもの相談役としてうってつけの方でした。

かつて、砥峯高原に、稲田植物研究所を開かれたときの、ご満悦ぶりをおもい出して、いまさらながら、稲田流の生き方の哲学の非凡さに心がうたれます。

今、幽明境を異にってしまったとはいえ、こせこせした風俗の世界から離れて、シダの世界の夢に遊んでおられるのではないのでしょうか。この世に遺された莫大な標本や資料は、後世の研究者への恵みとして、いつまでも「シダの稲田」として語り伝えられていくことでありましょう。

なお、稲田氏のご遺言により、生物学会へ研究奨励金の基金として金10万円を寄贈していただきました。全会員を代表して厚く御礼申しあげ、謹しんでご冥福を祈りあげます。

合掌

理事長 当 津 隆



在りし日の稲田氏